

エコー下穿刺

宮本 哲*

最近、穿刺の際ベッドサイドにエコーが準備されています。使用するかどうかは穿刺者次第ですが、なかには全例エコー下穿刺を行うスタッフもいます。エコーは血管の深さや走行が一目瞭然で、思いがけない狭窄や閉塞まで発見できて画期的です。一方、どこか寂しさも感じます。20年以上前、穿刺を始めたばかりの頃は穿刺困難な患者に上手く穿刺できたら嬉しかったし、失敗したら落ち込んでいました。エコー下穿刺が当たり前の現場ではそのような一喜一憂を味わえる機会は減ります。穿刺にエコーを使うという発想がない時代を過ごした人間としてはあのストレスを味わってほしいという気持ちもあります。若手スタッフに「ブラインドが基本だから」と言ってみたりしますが、あまり響いていないように感じます。患者、穿刺者双方にとってハッピーなのだから難しい血管を無理してブラインドで穿刺する必要がないという意見はもっともです。エコー下穿刺を始めた当初はまるでカンニングをしているみたいでどこか後ろめたさを感じていましたが、最近はそのような罪悪感は薄れました。当初、画面を見ながら穿刺することに違和感がありましたが今はありません。筆者自身いつの間にかエコーに頼っています。

生成 AI (artificial intelligence) を使用することの是非が話題になっています。新しいデバイスに頼りすぎると個人のスキルが低下するのではと危惧しますが、時間が経つとそのような危機感は薄らいで使用するのが当たり前にな

* 産業医科大学病院腎センター

ってしまうのでしょうか。理学所見のみで血管を把握し穿刺困難患者を穿刺していくエキスパートと呼ばれる方々はこのままブラインド穿刺を続けるか、早々にエコーを取り入れるか思案されていることと想像します。最近、深めのシャントをこそつとエコーを使用せずに穿刺しました。その患者から「エコーなしでも刺せるんやね」との言葉をいただき、なんとなく嬉しかったです。新しい手技を取り入れつつも、アナログでないと味わえない喜びを日々の診療のなかに見出していくことができればと思います。